

国立工芸館 収集の概要（令和7年度）

国立工芸館では、近現代の日本の工芸作品及びデザイン作品の体系的・通史的概観を可能としつつ時代精神を映し出す優品を積極的に収集するよう努めている。とりわけ日本工芸の近代化を示す作品の補充と、個々の表現を模索し多様な展開を見せる、戦後から現代に至る重要な作品の収集を中心としている。

今年度は特別購入により、岡部嶺男《窯変米色瓷博山炉》および、北原千鹿《置物 花の折枝》はじめ同一コレクターによる収集作品72点を購入した。前者は戦後陶芸界を牽引した作家の代表作であり、当館のコレクションを補完するものとなった。後者は従来通覧が困難であった近代日本金工の歩みを示す貴重な作品群であり、今後の研究の進展が期待される。くわえて陶芸の小川待子、ジェニファー・リー、木工の開島寿子、染織の朝倉美津子など女性作家による作品を重点的に収集し、ジェンダーをはじめ年代、ジャンルにおいてバランスのとれた収蔵を進めることができた。

国立工芸館 美術作品購入一覧（令和7年度）

	＝特別予算購入		
1		種別	陶磁
		作者名	岡部嶺男（1919-1990）
		作品名	窯変米色瓷博山炉
		制作年	1973年
		材質・形状	陶器
		寸法	h19.7 w17.6 d18.0
		解説	1960年代以降、本格的に青磁（青瓷）に取り組んだ岡部嶺男は、単なる復古ではなく「嶺男青瓷」と呼ばれる作風を確立した。本作は古陶磁を独自に解釈したオリジナルの器形と「窯変米色」と呼ばれる釉色で1970年代の発表当時も話題となったが、その完成度の高さから、今なお多くの陶芸家が目標とする作品でもある。
		取得額	33,000,000円
		展示予定	展示予定（もうわくわく2展；2026年7月～9月）
2		種別	金工
		作者名	岡部達男（1902-1964）
		作品名	黄銅置物 武人
		制作年	1939年
		材質・形状	黄銅
		寸法	総高h43.0 w42.5 d27.2（台除き）h40.7 w25.1 d 11.2
		解説	工芸作品の実用性を重視した多くの工人社メンバーに対して、岡部達男は実用から離れ鑑賞にたえる芸術性を重視した。大胆にデフォルメされた鎧兜の武人の姿はユーモラスでありつつ力強く、板金による人物置物を得意とした岡部の特徴がよく表れた作品。第3回新文展出品作。
		取得額（円）	1,500,000円
		展示予定	計画中
3		種別	金工
		作者名	北原千鹿（1887-1951）
		作品名	置物 花の折枝
		制作年	1927年
		材質・形状	金属、彫金
		寸法	h7.5 w31.0 d6.5
		解説	現代生活にあった新しい工芸の創出を目指した北原千鹿が工人社結成の翌年に制作した第8回帝展特選受賞作。植物の有機的な形態が幾何学的でシャープな造形へと置き換えられており、同時代に欧州で隆盛を迎えていたアール・デコの影響が色濃い。今年度収集した個人蒐集家による金工コレクションにおいて、蒐集のきっかけとなった作品。
		取得額（円）	3,500,000円
		展示予定	展示予定（デザイン・クロニクル展；2026年10月～2027年1月）
4		種別	金工
		作者名	北原千鹿（1887-1951）
		作品名	鹿図銀花瓶
		制作年	不明
		材質・形状	銀、彫金
		寸法	メス：h31.0 D15.1オス：h31.0 D15.1
		解説	胴体に彫金で草花と鹿が描かれており、日本の古典的な題材を扱いながらも花瓶のシャープなシルエットと図案化された文様が新しい工芸への志向を感じさせる。首の菊花紋から、皇室への献上品として制作された可能性も考えられる。北原千鹿の図案の処理と卓越した技術が融合した完成度の高い作品。
		取得額（円）	3,000,000円
		展示予定	計画中

5	種別	金工
	作者名	北原千鹿（1887-1951）
	作品名	麒麟置物
	制作年	不明
	材質・形状	金属、彫金
	寸法	h27.7 w21.0 d17.6
	解説	動物をデフォルメした造形に定評のある北原千鹿だが、空想上の動物である麒麟にもその手腕がいかに発揮され、非常に小ぶりな作品にもかかわらず強い存在感を放つ。特にフォルムのバランスや図案化された文様の処理には卓越したセンスを感じさせ、伝統を重んじながらも新しい表現を模索する北原千鹿の志向が見て取れる。
	取得額（円）	1,600,000円
	展示予定	計画中
6	種別	金工
	作者名	北原千鹿（1887-1951）
	作品名	山重疊金彩銀花瓶
	制作年	不明
	材質・形状	銀、金
	寸法	h30.5 w10.5 d10.5
	解説	胴体中央が窄まり口に向かって広がりながら伸びる角を落とした四角柱の花瓶のフォルムはモダンであり、一方山々や雲、草花や鹿等の伝統的な題材が繊細な彫金の線で表現されており、古典的題材と現代的表現を取り合わせた北原千鹿の技巧が光る一品。
	取得額（円）	1,000,000円
	展示予定	計画中
7	種別	金工
	作者名	佐々木象堂（1882-1961）
	作品名	鑄銅兩耳蔓艸文花瓶
	制作年	1936年
	材質・形状	銅、鑄造
	寸法	h25.5 w27.0
	解説	蠟型鑄造技法の名手である佐々木象堂。本作は優美な丸みを帯びた胴体に細く小さな取っ手、表面にはアラベスク風の繊細な植物文様が施されている。古代欧州の鉄器のような素朴な雰囲気の中に当時流行したアール・デコの影響も感じられ、時代を超越した普遍的な表現を目指す佐々木の志向が読み取れる。
	取得額（円）	1,000,000円
	展示予定	計画中
8	種別	金工
	作者名	佐々木象堂（1882-1961）
	作品名	金銅鴛鴦置物
	制作年	不明
	材質・形状	金銅、鑄造
	寸法	メス：h14.2 w7.2 h7.8オス：h16.3 w14.7 h9.0
	解説	蠟型鑄造技法初の人間国宝となった佐々木象堂は、細く引き延ばされたような動物造形を多く手がけたことでも知られる。金銅で番の鴛鴦を象った本作の、細部が簡略化されているものの生命感を宿したその造形は、本質を掴み表現しようとした佐々木の技量をよく示している。
	取得額（円）	1,500,000円
	展示予定	計画中
9	種別	金工
	作者名	大谷春彦ほか
	作品名	彫金花鳥屏風
	制作年	1943年
	材質・形状	金属
	寸法	屏風(半面)：約h151.7 w66.7
	解説	大谷春彦をはじめ当時活躍中の20名の金工作家による合作。各作家が花鳥を彫金で施した丸い板を配した一曲一双屏風。戦艦奉納工藝品展覧会のために制作され、金工史だけでなく戦時中の日本美術史をたどる上でも重要な作品。
	取得額（円）	1,000,000円
	展示予定	計画中

10	種別：金工 作者名：津田信夫(大寿) (1875-1946) 作品名：鑄銅 三友 制作年：1926年 材質・形状：青銅、鑄造 寸法：h35.8 w31.9 d31.5 解説：津田信夫は文部省からの命により、金工研究とりわけ鑄金術習得のため1923-1925年アメリカ、フランスとイタリアに留学した。三面に異なる植物図案が配された本作は日本帰国の翌年に制作され、海外各地の工芸の動向を色濃く反映した作品。第1回日本工芸美術展出品作。 取得額（円）：2,000,000円 展示予定：計画中
11	種別：金工 作者名：津田信夫(大寿) (1875-1946) 作品名：夕闇 制作年：1927年 材質・形状：青銅、鑄造 寸法：h35.4 w20.0 d14.7 解説：夕闇の中で胸を張り大きく目を見開いたフクロウ。写実的なフォルムだが細部は省略されており、滑らかな表面は金属の冷たさを感じさせず動き出しそうな生命感がある。所在不明であった時期も長く、金工史上において重要な作品。第8回帝展出品作。 取得額（円）：3,500,000円 展示予定：計画中
12	種別：金工 作者名：中野恵祥 (1899-1974) 作品名：黄銅透衝立 制作年：1932年 材質・形状：黄銅 寸法：h92.2 w105.3 d34.0 解説：真鍮などの板金を折り紙のように組み立てた動物など自由で軽快な造形を持ち味とする中野恵祥には珍しく、建築構造物を思わせる直線的なフレームと西洋とも東洋のものともつかない独特な紋様は、非常にモダンでシャープな印象を与える。よく知られた中野の作風とは異なる新しい一面を伺うことができる作品。 取得額（円）：2,000,000円 展示予定：計画中
13	種別：金工 作者名：村越道守 (1901-1943) 作品名：金属花器 制作年：1937年 材質・形状：金属 寸法：h16.0 w40.0 d16.9 解説：北原千鹿の門下で学んだ村越道守は若くして亡くなるが、短期間に多くの展覧会へ出品しその実力が認められた作家。本作は古代の船を彷彿とさせる造形と、口縁部と取っ手に並ぶ長い六角形の装飾穴という簡潔な構成からは、師から受け継ぐ工芸革新の精神が見てとれる。 取得額（円）：1,500,000円 展示予定：計画中

14	種別：金工 作者名：山脇洋二（1907-1982） 作品名：虎置物 制作年：1934年 材質・形状：金属、彫金 寸法：h14.5 w40.0 d3.0 解説：薄肉彫の金彩による作品で知られる山脇洋二だが、作風確立までは、古典を踏まえつつも新しい感覚を求め作風を次々と変えた。本作は東京美術学校卒業後4年目の初期作。飛び出す虎を厚みを持たせた量塊として表現した、若き日の意欲作である。 取得額（円）：1,500,000円 展示予定：展示予定（もうわくわく2展；2026年7月～9月）
15 	種別：陶磁 作者名：小川待子（1946-） 作品名：K-2000 制作年：2000年 材質・形状：陶器 寸法：h42.5 w29.4 d28.0 解説：器であることを強く意識させるような、ものを受け止める形態を原点として制作をする小川待子。内側に満ちた水の変化を想起させる本作は、ひび割れや剥離を露呈させることで器の概念を強調する小川の作品群とは趣を異にしており、作家の新たな局面の到来を示す作品。 取得額（円）：－ 展示予定：計画中
16 	種別：陶磁 作者名：隠崎隆一（1950-） 作品名：Una Mistura 花器 制作年：2016年 材質・形状：陶器 寸法：h59.7 w30.7 d26.7 解説：タイトルの「Una Mistura」は、イタリア語で「混淆」を意味する。隠崎隆一は2012年頃より田土採掘の際に捨てられていた原土をブレンドした陶土を使い始めた。「混淆土」特有のマーブル調の風合いを活かした表現は現代備前の深化を示すものである。 取得額（円）：－ 展示予定：計画中
17 	種別：陶磁 作者名：神農巖（1957-） 作品名：青磁堆磁線文鉢 制作年：2011年 材質・形状：磁器、堆磁 寸法：h13.0 D53.0 解説：「青磁」の人間国宝である神農巖は、泥漿にした磁土を筆で塗り重ね線文を盛り上げる「堆磁」という独自技法を考案。それにより線と装飾がフォルムと一体となった斬新な表現が可能となった。本作では中国や韓国の青磁を参考にしつつ、近年作家がテーマとする「生命」に着想し、水や血管、DNA螺旋などのイメージを重ねた。 取得額（円）：－ 展示予定：計画中
18 	種別：陶磁 作者名：鈴木治（1926-2001） 作品名：唐草の鳥 制作年：1971年 材質・形状：陶土、泥漿、陶器 寸法：h48.0 w48.1 d30.8 解説：陶芸の革新を先導した「走泥社」結成メンバーであった鈴木治は、純粹に立体造形としての芸術性を求めた。本作は赤い化粧土を施した焼締の技法により制作され、鳥が羽ばたく姿を極限まで単純化した明快な造形と、鳥のもつ装飾的な要素を表す唐草模様により、豊かなイメージを喚起させる。 取得額（円）：5,280,000円 展示予定：計画中

19 	種別：陶磁 作者名：鈴木藏（1934-） 作品名：志野茶碗 制作年：2019年 材質・形状：陶器 寸法：h10.4 w12.6 d13.0 解説：史上二人目となる「志野」の人間国宝に認定された鈴木藏は、ガス窯で志野独特の緋色表現に成功した。本作はタタラ成形による荒々しい躍動感に淡いピンクの釉に加え、志野の代名詞である緋色の発色と鉄絵付により、志野の伝統と革新が融合した一品。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
20 	種別：陶磁 作者名：三輪龍氣生(龍作、十二代休雪)（1940-） 作品名：生盃 初咲 制作年：2024年 材質・形状：陶器 寸法：h11.5 w12.7 d12.8 解説：「生盃」シリーズは2015年にはじまり、戦国時代の武将たちが戦の前に喫する覚悟の一服を表現している。本作は伝統的な白萩釉を全面にかけた作品であるが、ほの暗い茶室の中に浮かびあがる白はまるで人魂のようで、生死を控えた人間の命との呼応を感じさせる。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
21 	種別：陶磁 作者名：三輪龍氣生(龍作、十二代休雪)（1940-） 作品名：生盃 陶魂 制作年：2024年 材質・形状：陶器 寸法：h26.6 w33.7 d18.0 解説：「生盃」シリーズは2015年にはじまり、戦国時代の武将たちが戦の前に喫する覚悟の一服を表現している。本作では、轆轤のうねりと折れた刀の造形が高台と一体化し、用途にとらわれない斬新な表現へと昇華されている。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
22 	種別：陶磁 作者名：三輪龍氣生(龍作、十二代休雪)（1940-） 作品名：生盃 闘魂 制作年：2024年 材質・形状：陶器 寸法：h30.7 w24.0 d24.0 解説：「生盃」シリーズは2015年にはじまり、戦国時代の武将たちが戦の前に喫する覚悟の一服を表現している。本作では握られた拳を象った黒い高台に炎のような独特なフォルムという型破りな表現でありつつも、表面の白と金の釉や断面の赤い土色が萩焼の伝統を感じさせる。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
23 	種別：陶磁 作者名：森陶岳（1937-） 作品名：白瓷扁壺 制作年：1989年 材質・形状：陶器 寸法：h36.0 w20.5 d16.6 解説：型の継ぎ目のバリがそのまま残され、備前焼としては希少な白土を用いて白瓷風に焼きあがるよう調合されている。複雑な多面体による造形は森陶岳が追求する新しい備前の姿をよく伝えるものであり、また近代以降の焼締陶の歩みを俯瞰するうえでも重要な作品。 取得額（円）：- 展示予定：計画中

24 	種別：陶磁 作者名：樂直入（十五代吉左衛門）（1949-） 作品名：黒樂茶碗 Anima 制作年：1998年 材質・形状：陶器 寸法：h9.8 w11.9 d11.6 解説：十五代樂吉左衛門を襲名した直入が友人の陶芸家平井智一のために作った茶碗。欧州と日本を行き来する平井が旅の途中でも使いやすいよう、伝統を重視する作家にしては極めて稀な小服茶碗。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
25 	種別：陶磁 作者名：ジェニファー・リー（1956-） 作品名：Pale, speckled traces, speckled olive, tilted shelf 制作年：2022年 材質・形状：陶器、手びねり 寸法：h35.1 w18.4 d18.1 解説：日本と深い縁があるイギリスの作家が、手びねりによって成形した作品。わずかに加えたカラーグレイの跡で、焼成を経て白い胴に流れるような斑点が浮かび上がる。陶芸の物理化学的必然が導く事象に美的価値を見出すジェニファー・リーの陶芸観が見事に反映された作品。 取得額（円）：- 展示予定：貸出予定（益子陶芸美術館；2026年12月～2027年4月）
26 	種別：陶磁 作者名：八木一夫（1918-1979） 作品名：黒陶 肖像 制作年：1964年 材質・形状：陶器 寸法：h22.1 w16.4 d19.0 解説：用途に縛られない「オブジェ焼」の先駆者して、陶芸における伝統と革新を体現する八木一夫。人物をユーモラスに表現した本作では、黒陶と皺寄手という伝統的技法を用いて新たな表現が模索されており、作家の作風変遷を語る上でも欠かせない作品。 取得額（円）：18,700,000円 展示予定：計画中
27 	種別：漆工 作者名：水口咲（1974-） 作品名：乾漆箱「新雪」 制作年：2021年 材質・形状：漆、乾漆 寸法：h12.0 w29.5 d26.5 解説：艶やかな朱漆とは色も質感も対極にある、降り積もった雪の表現の試みた意欲作。伝統的な技術を継承しつつも独自の表現を目指す若手髹漆家として、滑らかな表面とシンプルなフォルムに瑞々しい感性を託した本作は、第68回日本伝統工芸展NHK会長賞受賞作。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
28 	種別：木工 作者名：中川清司（1942-） 作品名：榧桎合わせ鉄鉢 制作年：1974年 材質・形状：榧、桎合わせ 寸法：h13.0 D53.0 解説：24枚に切り出した榧を鉄鉢の形に寄せ、木目が模様となるよう、桎合わせの技法で接合している。平面から蓋物などの立体へと展開してゆく中川清司の制作の変遷において、初期の重要な作品。近畿支部第3回日本工芸会展日本工芸会賞受賞作。 取得額（円）：- 展示予定：計画中

29 	種別：金工 作者名：中川衛（1947-） 作品名：金銀象嵌「翡翠置物」 制作年：2017年 材質・形状：臙銀、鑄造、象嵌、金、赤銅 寸法：h12.0 w13.0 d8.0 解説：「彫金」の人間国宝に認定された中川衛はデザインを重視し、それを緻密な加賀象嵌の技術で巧みに作品化する。花器が広く知られる中川にとって本作のような置物は珍しい。カワセミの愛らしい造形もさることながら、羽に象嵌された正倉院文様の細やかさが光る一品。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
30 	種別：金工 作者名：畠山耕治（1956-） 作品名：bronze as Bronze no. 23 制作年：2023年 材質・形状：銅 寸法：h63.7 w39.6 解説：畠山耕治は伝統的な産地である富山県高岡市において、鑄金技法をベースに独自の感性で制作を続ける。本作は2008年頃より取り組んできた「青銅で在ること」と題するシリーズの一点で原初的な造形としてうつわを展示空間の中でいかに見せるかを試みた作品。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
31 	種別：金工 作者名：原智（1962-） 作品名：魚々子象嵌花器 制作年：2022年 材質・形状：金、銀、赤銅、鉄、鍛金、象嵌、錆び付け、漆焼き仕上げ 寸法：h25.0 D25.0 解説：鍛金で成形したフォルムに錆び付けと漆の焼き付け仕上げ、小さな粒状金属の突起が見えるほど細かい鍛金と象嵌を組み合わせた作家独自の技法「魚々子象嵌」により制作された本作。人の脳のイメージを抽象化した幾何学文様が緻密に表現されている。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
32 	種別：その他工芸 作者名：沖潤子（1963-） 作品名：水蜜桃 制作年：2020年 材質・形状：麻、絹、綿 寸法：h76.7 w38.6 d5.0 解説：これまで女性の趣味の範疇で捉えられることが多かった刺繍を、類稀なる色彩感覚による構成と古布の味わいを生かし作品に昇華させる沖潤子。本作は、幼少期に母が食後に皮を剥いてくれた桃の瑞々しさを心象風景として表現している。淡い色彩と素材の質感が印象的な作品。 取得額（円）：- 展示予定：計画中
33	種別：陶磁 作者名：十二代酒井田柿右衛門（1878-1963） 作品名：東海道五十三次図七寸皿 制作年：1949年 材質・形状：磁器、色絵 寸法：各h2.5 D19.1 解説：広重の『東海道五十三次』の全絵柄を忠実に再現しつつも、所々アレンジが見られる。風景は藍色の染付、人物は上絵よる染錦の技法によりいきいきと描写されている。客注を受け数組が制作されたがその点数は定かではなく、欠けることなく完品で揃っているのも非常に貴重。 取得額（円）：11,000,000円 展示予定：計画中

34	種別	陶磁
	作者名	藤本能道（1919-1992）
	作品名	雪白釉釉描加彩柳枝宿鴉図長四角筥
	制作年	1988年
	材質・形状	磁器
	寸法	h7.6 w23.0 d14.8
	解説	「色絵磁器」の人間国宝認定後の作品。輪郭線を描かず色面と濃淡の滲みで表現する没骨描法と、色釉で描き本焼きした後、さらに上絵具で描き加えて低温で焼き付ける作家独自の手法「釉描加彩」が随所に見られる。色絵を器の装飾の域を超え、絵画的空間にまで高めた藤本能道の表現の魅力を伝える優品
	取得額（円）	1,474,000円
展示予定：計画中		
35	種別	染織
	作者名	二塚長生（1946-）
	作品名	友禪訪問着「春動く」
	制作年	2022年
	材質・形状	絹、友禪
	寸法	h170.0 w130.0
	解説	「友禪」の人間国宝に認定された二塚長生。雪解け水によって水量が増した早春の滝をモチーフとする。石川県立美術館で国宝《色絵雉香炉》の鑑賞中に羽根の描写を自然から切り離した文様と見直した経験をもとに、ここでは瀑布と対峙するリアルな感覚と装飾性とを築いた。
	取得額（円）	-
展示予定：計画中		
36	種別	染織
	作者名	二塚長生（1946-）
	作品名	友禪訪問着「夕刻への雲間」
	制作年	2024年
	材質・形状	絹、友禪
	寸法	h173.0 w134.0
	解説	「友禪」の人間国宝に認定された二塚長生。高台に住む作者が日々眺め暮らす雲の様態を着物に留めている。糊糸目を最も生かす線条の粗密は、「春動く」でテーマとした落水と同様、決して留まることのない雲の「もやもやとした気分」を時間的経過とともに巧みに表象した作
	取得額（円）	-
展示予定：計画中		
37	種別	金工
	作者名	初代山川孝次（1828-1882）
	作品名	金銀蓮葉形水盤
	制作年	江戸末期～明治初期
	材質・形状	銀、金
	寸法	h13.6 w45.5 d49.2
	解説	石川県の金工の礎を築いた初代山川孝次。蓮の葉を模した銀製の水盤に、水滴の部分に被せられた金がアクセントとなる。初代作として判明している現存作品は少なく、またそのほとんどは細密な象嵌による作品のため、本作のようなおおらかな造形の作品は極めて珍しい。
	取得額（円）	3,520,000円
展示予定：計画中		
ほか77点／計114点 購入総額：177,033,450円		